

(前頁からの続き)

学級を行き来するため、時間割により先生の指示に従い、指示された子どもに付き添っている。

・特別支援は画一的でなく、いろいろなケースがあり一概に言えない。

・特別支援では、普通学級に入っている子と特別学級に入っている子への2つの支援があるが、どちらを選ぶかは父母の考えであり、私たち支援者は学校と父母の話合いを踏まえて、支援していくことが大切。

・特別支援では、自分の力不足でこれでよいのかと考えることもある中で、やはり子供中心にやっていくことが大切。

(2) 学習支援活動で実感した問題

・学校が子供の学習環境を整えるために家庭支援に涙ぐましい努力をしている事例の報告もあり、教育の重さを改めて知った。

・支援学校で、休み時間も昔遊び等子供と一緒に時間が続き、座っておれるのは給食の時だけ。70歳を過ぎると体力の限界を感じる。

・子どもの潜在能力を引き出すのに、褒めてあげることやルールをしっかり教えることが大切。

・学習支援者の役割では、若い先生方は熱心だが意外に世事に疎いことや、テレビや携帯が普及し、子どもの周囲には情報が氾濫しており、子どもの活字ばなれも目立ち、読み聞かせに人気があるものの、読書の習慣が根付かないのや、以前は祖父母も含め親が子に躰をしていたのが出来ていないのを補うのも大切。

・学習支援を担う経験豊富なシルバー人材が“かつての祖父母の役割”を学校を舞台に果たしている。

(3) 学習支援者と学校側コミュニケーションの問題

・学習支援者と学校側コミュニケーションは学習支援を円滑に進める上で特に重要。

・年明けの1月になると、校長先生に来期も支援してもらえるかどうかの話しがあり学校との良い関係が出来上がっている。

・具体的な学習支援活動のなかで学校の要請とマッチングしない事例や支援学級で先生と一度も会話がなかったという事例もあり、学校或いは先生と仲良くなるのが大切であるものの、学校・先生

と私たちとの良い関係をどう築いていくかが大きな課題。

・校長、教頭先生は忙しい。しかし、活動面で納得出来ない場合は勇気を出して話し合う機会を作ってもらふ努力が必要。

・活動上特に支障がなければ、担任教諭とは充分話し合えば、特段校長や教頭を意識する必要はなく、誠実に子どもに向き合い、粛々と活動に打ち込めばよい。

・学校が何を期待しているのか、判りづらい。

・先生方との対話や意思の疎通が十分でない。

・自分達に対する学校側の評価や、何を期待されているのかがわからない。

・いろいろ不満や不安があっても、むしろこちら側から先生方の中に能動的に入っていく、自分の位置づけや、やりがいの発見に努めるようにしたい。

・学習支援活動についての学校側の対応が、まちまちである。学校をあげて、丁寧に対応してくれる学校と、校長も教頭も全く知らん顔をしている学校もある。ボランティアとして心を持って当たっているのに、学校側も心を持って対応して欲しい。心と心のつながりを求めたい。

(4) その他

・カレッジの地域活動の一環として支援する学校と拘わっていく場合、活動を継続していくために、「グループわと今後どのように連携していけばよいか」これからの課題がある。

・これから支援活動に参加するのに、支援する学校の探し方で、家の近くが長続きするために大切であり、まだリストに上がっていない要請校が今後もあるはずだ。

平成21年度第3回「学習支援の集い」は11月下旬開催を予定しています。

委員長 (音9) 中沢 保夫
第2回(7月21日開催)では、はじめて、神戸市教育委員会 村谷首席指導主事、神戸市シルバーカレッジ 大塚事務局長にご出席いただきました。グループディスカッションでは出席者の熱心な話し合いが行われましたことも併せてご報告申し上げます。